
昼下がり

やぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
昼下がり

【Nコード】
N1124P

【作者名】
やぎ

【あらすじ】
リア充乙と言われ。多分首が痛いかも

yagimokiさんは「昼のソファ」で登場人物が「嘘をつく」「魔法」という単語を使ったお話を考えて下さい
http://shindanmaker.com/28927

昼下がりの我が家。俺と彼女、二人で昼食をとっていた。目の前には、レトルトのミートソース Pastaがあつた皿が二つ。皿にはトマトの赤だけが残ってる。彼女が唐突に口を開く。

「ねえ知ってる？ トマトって焼くと発ガン作用のある成分が出来ちゃうんだって」

「……それ、本当？」

屈託のない笑顔でこっちを見る。またまだ、あどけなさが残る顔。そこにはイタズラ心が含まれていた。

「嘘」「なんだよ。嘘か本当か分からないこと言うなよ」

実際、彼女が語るものが本当なのか、嘘なのかわからない。本当の時もあれば嘘の時もある。いつもそれに振り回される。首から肩にかけて温度があがる。彼女の腕が絡み付いてきた。

「全部嘘かもしれないし、全部が本当かもしれない。はたまた、嘘と本当が半々なのかもよ。それを見極めるのは、貴方の役目なんだよ」

暑くなってきたので彼女の腕をほどく。こう密着して絡み付けられるのは若干恥ずかしい部分がある。

「なんだ、それ」

彼女は不満そうに頬を膨らませた。そういう子供のような行動にドキッとしたが、呆れた顔で俺は立ち上がった。トマトの赤が残る皿を片付ける為にキッチンへ向かう。冷たい水に皿をさらす。赤の

汚れは浮き始め徐々に白さを取り戻す。

「じゃあさ、じゃあさ、魔法の言葉教えてあげようか？」

これを使えばなんと、お馬鹿さんな貴方でも嘘か真かわかるかもよ」
キッチンから彼女の顔を見る。子供のような無邪気な笑顔を向けてくる。

「それは？」

「それはねー」

彼女は白い歯が見える位の満面の笑みを浮かべている。

「全部嘘」

どうやら、俺は彼女の全貌を理解するのはまだまだ無理なようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1124p/>

昼下がり

2010年11月24日17時47分発行